Nagoya City University

名古屋市立大学　人文社会学部研究紀要　第20号　2006年３月

〔学術論文〕

カント批判哲学としての現代

Unsere Zeit als Kants Kritische Philosophie

森　哲彦
Tetsuhiko Mori

「我々はカント以降、不可避な道を行く。……
カントによって拓かれた道が最後まで歩まれる
場合に限り、我々は批判的な純粋性において、
この包括者は我々に受け入れられるのである」
（『理性と実存』Jaspers, K.: V.u.E.S.30）。

Ⅰ　序

カント哲学の主題は、新カント学派（Neukantianismus）では、認識論（Erkenntnistheorie）にあり、存在論（Ontologie）、形而上学（Metaphysik）の存立意義は、少なくとも否定的、懐疑的に解釈する、という評価がなされてきた。つまり新カント学派は、カント批判哲学の研究を、もっぱら認識批判や科学論に設定するという一面的方向で大きな成果を挙げてきた来たのである。しかし1920年代に入り、特に1929年ダヴォス論争以降、認識論中心のカント解釈は、新カント学派の部分的な観点によるものと批判され、むしろカント哲学の課題は、逆に存在論や形而上学の確立にあるとされる新しいカント哲学解釈が出現したのである。この新しい潮流の代表者であるハイデッガー（M.Heidegger）は、『カントと形而上学の問題』（1929年）[1]で、カント（I.Kant）の『純粋理性批判』（1781年）[2]を、存在論的認識の理論とみなして「形而上学の基礎づけと解釈し、これによって「形而上学の問題」を基礎存在論（Fundamentalontologie）の問題として提示する」[3]ことをその課題としていた。今一人、ハイデッガーの見解に近く、独自の方向を見出したヤスパース（K.Jaspers 1883-1969）も、この問題に言及している。彼は著書『世界観の心理学』（1919年）[4]序文において、特に決定的な影響を受けた５名の哲学者の一人としてカントを挙げている。[5]

そこではまずカントの存在論について、ヤスパースによれば、カントの思想は「全体または実存とみなされるような或るもの、理念、精神、生命、実体などの言葉で表現されるような或るもの、証明されず証明されえないような或るもの……これらが目標である」[6]とする。一方、カントの認識論について、ヤスパースは『偉大な哲学者たち』（1957年）[7]において「我々の主題は、

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

まずカントの「認識論」とよばれるものである」。[8] そして「実存上でなく……我々は世界中のあらゆるものを認識する」[9] としている。このようにヤスパースは、ハイデッガーとは異なり、カント哲学を存在論としてのみならず、認識論としてもとらえているのである。またヤスパースは「意識」の問題について「意識の諸階梯」を取り上げ、「〔現存在の〕体験としての意識」から「意識一般（Bewußtsein überhaupt）」へ、更に「〔実体の〕絶対的意識（absolutes Bebußtsein）」への関係について述べている。[10] このことから、グルネルト（E.Grunert）によって、カントでの理論理性に対する実践理性の優位（Primat der praktischen Vernunft）を、ヤスパースでの意識一般に対する絶対的意識の優位に対応せしめることが指摘されている[11]。そこで本稿では、まずカントの理論理性とそれに対する実践理性の優位、それに関わるヤスパースの理性と実存及びその関係の哲学的基礎づけを解明しようとする。そこから、ヤスパースのカント把握、カントとヤスパースの類似性、更にカントに対する現代的解釈の可能性の存立を見るものである。

Ⅱ　カントにおける理論理性と実践理性の優位

カントは『純粋理性批判』において、まず正しい「知識」の構成のための条件として純粋理性のうち、理論的使用（theoretischer Gebrauch）、すなわち理論理性の側面を取り上げる。そこでは受容的な下級認識能力を意味する「感性（Sinnlichkeit）」と自発的な「高級認識能力」（B169）を意味する「悟性（Verstand）」とを区分し、従来からの人間の知的能力の曖昧性を批判し、これら「感性」に対する「悟性」の優位による一致（調停）によってのみ正しい認識の構成がなされることを示した。そして統一的な「最高の認識能力」（B385）を意味する理性に至る。つまり「我々の認識は、感性から悟性へと進み、ついに理性に終わる」（B355）のである。換言すれば、ここに純粋理性は「感性」と結合する「理論的使用」（B661）から「悟性」と結合する「思弁的使用（spekulativer Gebrauch）」（B384）に至り、更に純粋理性はここに「実践的使用（praktischer Gebrauch）」（B825）に至るものとなる。「超越論的弁証論（transzendentale Dialektik）」では、正しくこの純粋理性の理論的使用から思弁的使用を経て、実践的使用の転換を示唆している。そしてカントは、この思弁的使用と実践的使用の関係について次のように規定している。すなわち「理性は、純然たる思弁の領域では、十分な証明根拠を欠くために前提することが出来なかったようなものを、実践的使用においては想定する権利をもつものである」（B804）とする。つまり「およそ純粋理性の正しい使用の……規準は、それ（純粋理性）の思弁的使用に関するものではなくて、それの実践的使用に関するものでなくてはならない」（B825）とする。そして「我々は理性の実践的使用をこれから攻究しようと思う」（B825）としたところで、『純粋理性批判』は一応完結せしめられる。このことは純粋理性の理論的使用、すなわち理論理性に基づく認識は、さらに純粋理性の実践的使用、すなわち実践理性によって統一されることを意味していたのである。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

では理論理性と実践理性は、いかように統一、調停されるのか。カントは『純粋理性批判』に続くものとして著された『実践理性批判』(1788年)[12] の「序論、実践理性批判の理念」において、次のように述べている。すなわち「理性の理論的使用は単なる認識能力の対象を問題にし」(AV15) そして「理性の実践的使用において、理性は意志の規定根拠を問題とするのであるが、その意志とは……自分の持つ原因をなす力を規定する能力である」(AV15) とする。その際「理性によって統一された」もののうちで、或るものが他のものと統一する際に、或るものが「第一の規定根拠にある」(AV119) ということは、或るものが他のものに「優位」にあるということである。以上のことから、カントのいう純粋理性には、理論理性と実践理性が含まれ、二つは統一されるものであるが、その際、実践理性の規定根拠から「理論理性」に対する「実践理性の優位」が前提とされている。そしてその「実践理性の優位」は、カントによれば、物自体 (Ding an sich) への思考の道を示しているのである。

Ⅲ　カントにおける物自体と方法

カントの認識論においては、現象 (Erscheinung) と物自体を区別することが提起される。カントによれば「現象とは、知覚の対象である。現象は、なんらかの客観一般の内容を含んでいる」(B207) とする。つまり現象が、基本的に客観妥当性を主張しうる認識の対象を意味している。そして現象の背後にその原因として想定される不可知の対象として、「物自体」あるいは「仮象 (Shein)」が存在する。従って「現象は、我々の認識の対象であって、物自体ではない」(B335) として、カントは現象と物自体を明確に区別するのである。この区別の解釈から認識論者は、認識の対象である現象の解明を行い、認識不可の物自体や仮象を研究対象から除外しようとした。しかしこの物自体や仮象を「思考することができなければならないという考えは依然として保証される」(BXXVI) のである。ここに「物自体」の「存在」を容認する存在論の立場が確立する。かくしてアディッケス (E.Adiekes) も言うように、カントは物自体の存在を「絶対自明なこととして一度も疑ったことがないのだ」[13] と確信していたといえよう。そしてその物自体を導き出す方法として、カントは「対象に関する認識ではなくて、むしろ我々が一般に対象を認識する仕方 (方法) に関する認識を超越的 (transzendent) と名付ける」(B25) とする。

では超越的とは何か。それは「或る種の概念の対象が一切の可能的経験の限界外でしか見出されえないような概念の客観的実在性 (objektive Realität) を主張する」(B809) ことである。カントは「超越論的弁証論」において更に「超越論的原則」を「経験への適用が可能的経験の限界を超出するもの」(B352) とする。ここに至りカントは、物自体を示す超越論的仮象について述べている。すなわち「我々がここで論究しようとするのは、経験的仮象ではなく、もっぱら超越論的仮象である。……超越論的仮象は、批判的警告を一切無視したカテゴリーの経験的使用の限界

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

外に我々を連れ出す」(B352) とする。かくして我々を限界外に連れ出したものが、超越論的仮象である。従って物自体は限界概念である、と言われるゆえである。この事態は、このような限界があるにもかかわらず、純粋理性は、絶えずこの限界を乗り越えようとする本来の傾向を有することを示している。つまり超越論的仮象は、純粋理性そのもののうちに源泉を持つということになる。この超越論的仮象は、心理学的仮象、宇宙論的仮象、神学的仮象に分けられ、その内容は「霊魂の不滅」、「人間の自由」、「神の存在」の問題である。これらは理論理性の範囲外であり、実践理性としての物自体である。このようにカントにあっては、理論理性と実践理性は、一種対照的でありながら、実践理性が（純粋理性により）物自体に客観的実在性を認めるものとなっているのである。このようなカントの物自体論の思考性のうちに、ヤスパースの理性から実存への道が予測されるのである。そこでヤスパースの理性については、二つの大部な哲学的主著[14]のうち『真理について』(1947年)[15]から、彼の哲学的基礎づけを見ていこう。

Ⅳ　ヤスパースにおける理性

1　さてヤスパース哲学は、キルケゴール（S.A.Kierkegard）やニーチェ（F.W.Nietzsche）から強い影響を受けた「実存からの哲学」であるといえよう。しかしヤスパースは、ヘーゲル（G.W.F.Hegel）哲学の「理性」と「体系」に抗したキルケゴールとは異なり、20世紀のニヒリズム（Nihilismus）に対抗するために、逆に「理性」を重視し、思想のもつ体系的構成を否定しなかった。すなわちヤスパースは、著書『真理について』において「実存が決断するためには、実存が相互に結びつけられているという広さが必要とされる。この広さは、理性によって可能となる」[16]とする。このように実存と理性の「相互の結びつき」は、本性上すでに体系的であり、しかも実存は、理性を前提としているのである。そしてこのことは、ヤスパースの「実存からの哲学」が同時に「理性による哲学」であることを意味している。従ってヤスパースによれば「理性と実存との徹底的な両極性は、排他的な関係とせられてはならない」[17]ものである。そして理性と実存について「一つの様式は、他の様式を要求する。一つの様式を失うことは、他のすべての様式を不真実ならしめる。それゆえ哲学する者は、包括者（das Umgreifende）のこれらの様式のうち、その一つでも逸しないように努める」[18]のである。つまりヤスパースは、理性と実存の両面を自己の「哲学すること」のうちに位置付けようとし、そこで展開されるものは理性と実存の両極性であり、本質的な相互関連である。

2　さて純粋理性を重要視するカント哲学をヤスパースは「心理学的、論理学的、方法論的、形而上学的思想へと区別する」ことに反対する。そして彼は「カントの哲学的思想は、そのものすべてを含み、一つの全体的な活動として、まとめて実現されて初めて光輝あるものならしめ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

る」[19] とするように、単に認識論でなく、存在論としても一つの全体的活動として把握することを主張する。そしてヤスパースは、カント哲学における理性概念について影響を受けたことを次のように述べる。ヤスパースは「「哲学すること」において……世界は全体としては理性的に把握できないが、しかし世界の中で理性でもって事を処そうと決意している。従って私が「哲学すること」において実現したい思っていることは、その意義をカントとレッシング（G.F.Lessing）から再発見したのであるが、「理性」という言葉で突っ込んで論じたところのものである」[20] とする。そして「理性という言葉は、我々にとって、カントは広さと、明るさと、誠実さを担っている」[21] とする。このようにヤスパースは、実存の自覚のために、カントのいう理性概念の必要性を強調したのである。つまり実存を自覚するためには「媒介者（Mittler）としての理性」によって可能となる。すなわち「悟性が積極的もしくは消極的な固定化によって安全にしようと欲する」[22] のに対し、逆に向上性を有する「理性は最も異質なものによってもなお引きつけられる」[23] ので、この意味で理性は「実存の道具（Werkzeug der Existenz）」[24] とも称されるのである。

3　理性はまた「総体的な交わり（totaler Kommunikationswille）への意志」[25] として実存への道を開いて行く。この理性について、さらにヤスパースは「他者へとたえず押し進んでいくものとしての理性は、普遍的な共同の生の可能性、〔他者に〕関与することの可能性である。理性とは聞きとること（Vernehmen）であるが、存在し、また存在しうるものすべてを制限なく聞きとる」[26] ことである。しかも「真正な交わりを可能にするために、理性は誠実さ……無制限の開放性」[26] をもって「正義を実現することを欲する」[27] 意志の働きである。つまり「理性は……完成品のような真理」[28] ではなく「理性はそれ自身無制限の開放性」[29] なのである。しかし「理性はまだ愛ではないが……愛の真理と純粋さの条件であり」、[30]「愛は理性の魂である」。[31] つまり「愛はその深さを実存と実存との関係において有する」[32] のである。このような機能を持つ理性は、暗号を聞き取ろうとし「一者（das Eine）の新たな経験の源泉となるような戦いの真正さを可能にする」[33] のである。それゆえ「理性は、実存に担われており、実存なしには没落してしまうであろう」し、「実存は理性によってのみ明瞭となり、理性は実存によってのみ内実（Gehalt）をえる」[34] とされるように、理性の機能のためには、実存の存在が不可欠となるのである。

V　ヤスパースにおける実存

1　ヤスパースにおける「実存」とは何か。ヤスパースは、主著『哲学』（1932年）の「哲学への序説」で、この実存について、次のように３点にわたり簡潔に規定している。すなわち(1)「実存とは、決して客観となることのないものである」。[35] (2)「実存とは、私がそれに基づいて考え、行動するところの根源（Ursprung）であり、何ものをも認識することのない思想過程

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

（Gedankenfolgen）において私がそれについて語るところのものである」。[35] そして(3)「実存とは、自分自身に関係し、そうすることにおいて超越者（Transzendenz）に関係するところのものである」。[35] そこで詳しく見ると、まず(1)での実存とは、例えば、ヘーゲルのいう絶対的精神（absoluter Geist）のようなものでなく、従って「実存の存在は、或る種の客観的存在をつねに前提しなければならぬところの定義可能の概念によっては言い表されない」[35] ものである。このようにヤスパースによれば「この実存という言葉は」なんら概念ではなく、従って客観化し対象化してとらえられるものは、存在の究極の根拠ではないということである。次に(2)での実存とは「客観の中の客観として現実的に存在するべきでない」[35] ものである。しかしこの「存在するということは、存在することを根源的に決定することを意味する」[35] のである。従って実存とは「一切のものが何であるかを、なお自ら決定する」[36] ところのものである。それゆえ(1)での実存に関連して、非対象的な実存を対象化して認識することでなく、自己の暗黒な根拠である実存を自ら開明し、かつ自覚する[37] ことを意味するのである。さらに(3)の実存とは「超越者に関係するところのもの」[38] であって「実存が問いかける現実としての超越者はもはや普遍妥当的に問われることはできない」[39] ものである。従って実存は、それだけで自立的に存在する根拠を有していない。実存は、自己がそのような超越者への帰依に関係することを真に自覚するとき、実存は初めて実存することになるのである。このことからヤスパースの実存思想は、超越の哲学ということができよう。『哲学』でヤスパースは、カントの世界、魂、神の三つの超越論的仮象に対応させて、世界、実存、超越者（神）の三つを挙げている。そしてそれは、世界から実存へ、更に実存から神への超越を通してである。

さてヤスパースの『哲学』体系は、第一巻「哲学的世界定位（philosophische Weltorientierung）」、第二巻「実存開明（Existenzerhellung）」、第三巻「形而上学」により構成されている。そして世界も実存の真の包括者でないことを解明するのが「哲学的世界定位」と「実存開明」であり、真の包括者としての超越者（神）を問題にするのが「形而上学」である。このようにしてヤスパース哲学は、世界から実存へ、さらに超越者へと不断に超越して行くのである。以下では『哲学』の内容を概観することにより、ヤスパースのいう実存の要点を見て行くことにする。

２　第一巻「哲学的世界定位」では、世界は、我々が生命をもった全体、「現存在（Dasein）」として存在している場合の唯一の拠り所である。しかしかかる世界は、存在そのものではありえない。なぜなら現存在の全体は、意識一般の対象であり、客観的存在である限り、カントがいうように、それは現象であって、存在ではないからである。この世界が決して完結した全体でないことは、例えば、科学が世界認識に際して、原理的に越え出ることのできない限界を有していること、つまり内容的にも科学の要求する次の三つが次々に挫折することからも、明らかである。すなわち、まず第一にすべての学的認識は、強制力をもつものであることを要求するが、その要求

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

は、僭称された権利にすぎない。第二に科学は、世界の無制限性の克服を志ざし、且つ要求するが、その要求は、カントの理念〔超越論的〕と二律背反〔全理性能力の限界〕が典型的に示すように、挫折する。第三に科学は、相寄って一つの大きな体系への完結を要求するが、科学は本来、特殊性を有しており、一つの完結する体系を示さないので、この要求も挫折する。このヤスパースにおける科学の限界は、彼の悟性と理性との区別からも判明する。彼によれば「悟性は、孤立させつつ把握することによって対象的に理解することである」。[40] これに対し「理性は、悟性を媒介とするものでありながら、悟性以上のものである」[41]。それゆえ「理性は、或る一つの真理がそれ自身のうちに限定されることを防止する」[42] のである。そして「理性は……諸々の内容の無制限の開放性」[43] を示すのである。さらにまたそうした科学の立場を越えて、完結した世界像を描こうと試みる実証主義（Positivismus）や観念論（Idealismus）の哲学も結局自らの整合性を有しえない。このようにしてヤスパースは「世界は、存在そのものではありえず、現象である」と結論する。[44] ここにおいてヤスパースは、世界に依存する現存在は超越の一歩を踏み出し、世界存在では解消できない「実存」に包括者を求めていく。

3　第二巻「実存開明」では、ヤスパースは、まず「自我そのもの」について考察し、次に本来の自己である実存を構成する「交わり」、「歴史性（Geschichtlichkeit）」、「自由（Freihait）」、「限界状況（Grenzsituation）」の問題を把握して、内部から実存を開明しようとする。まず第一に「交わり」においては「私は他者との交わりにおいてのみ存在する」[45] とするように、実存が決して個々ばらばらのものとして孤立するものではない。そして「交わりにおいて顕になる過程は、闘いであると同時に愛であるような、あのたぐいまれな闘争である」[46] とする。その交わりは「闘いながらの愛（die kämpfende Liebe）」[46] であり「真理は共同体を建設する」[47] ところのものである。このように実存は「愛を伴う闘争（liebender Kampf）」[48] をもって、共同体の創造に参加するのである。そして「交わりの闘争においては、それ独特の連帯性（Solidarität）がある」。[49] つまり「実存」は、単独者のそれに居れるものでなく「実存」の超越は「愛を伴う闘争」においのみ可能なのである。第二に「歴史性」は「現存在と実存との統一」、[50]「時間と永遠との統一」[51] として示される。しかも「歴史性」において「実存することは、瞬間を深めることであり」、[51]「瞬間とは事実的瞬間を永遠の現在へ深める」。[51] このような「永遠性はこの瞬間に絶対的に結ばれている」[52] のである。このように実存が真に実存しうる「時」である「永遠の現在」としての「瞬間」が、実存を内部から開明するのである。つまり「実存をその可能的広さにおいて把握する」[53] ことが、歴史性の問題である。それゆえ「実存は、その真の歴史性を意識する」[54] 必要があるのである。第三に「自由」においては「いかなる自由も法則なしには存在しない」[55] し、この法則に従うところの「超越論的自由」[55] を離れた自由は、実存の自由ではなくなる。それゆえ実存の自由が、実は超越者に束縛された運命的必然性と一つであることが、それぞ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

れ開明される。だが「実存」が生成しうるのは、最後の「限界状況」においてのみである。そこで第四に「限界状況」とは、実存の有限性の自覚を促す最重要な契機として明示される。つまり「実存」が「実存」になりうるのは、自己がその都度いつも一定の歴史的状況におかれているという「限界状況」を自覚していることである。すなわち死（Tod）、悩み（Leiden）、争い（Kamfp）、罪（Schuld）は、我々が越え出ることも変化させることもできない状況、つまり「存在における可能的実存」の限界が、この「限界状況」である。従って「限界状況は、もはや意識一般にとっての状況ではない」[56] のである。つまり「限界状況は、実存にとってのみ、現実として感得されるものとなる。限界状況を経験することと、実存することとは、一つのことである」。[57] 人間の実体は、主観性と客観性の対立を超越し、それらを包括し、その対立を可能にする根源である。これが「実存開明である。[58]

４　第三巻「形而上学」では、実存から真の包括者である「超越者」への超越が促される。そこには、我々が究極的存在へと超越する三つの道が、体系性として位置付けられる。三つの道とは、すなわち(1)「形式的超越すること（formale Transzendieren)」、[59] (2)「超越者への実存的諸関連（existentielle Bezüge zur Transzendenz)」、[60] (3)「暗号文字の解読（Lesen der Chiffreschrift)」[61] である。ヤスパースによれば、(1)では、「思惟しうるものから思惟しえないものへの超越」、[62]「この存在が超越者なのである」。[63] 従って思惟しようとして不可能な思惟的存在は、未だ超越者の現実ではないのである。(2)では、「反抗と帰依」、「脱落と昇騰」、「昼の法則と夜への熱情」、「多者の豊富と一者」といった二律背反を脱しない超越者への志向では、いまだ超越者への完全な顕現は見られない。(3)では、現象が暗号化する瞬間に超越者の顕在がもたらされるのである。ここにおいて、我々が超越者と関わることの最終段階である「暗号の解読」に到達する。すなわち「限界状況」における実存は、さらに己れを越えて、存在そのものである「超越者（神)」へと指示され、これに関係して行く。つまり現象は、超越者の暗号となり、世界は「暗号の世界」となる。暗号はまた、実存が聞きとる「超越者の直接的なことば」であり、「存在のことば」とも呼ばれているものである。超越者の存在は、「自然」や「歴史」や「芸術」といった諸々の「暗号」を解読することによって、実存に示されるのである。なかでも特に、かの限界状況での挫折の経験をもって「決定的な暗号」とする「挫折はすべての暗号」であって、それに対しては、沈黙によってのみ答えることが可能となる。実存の自覚は、正しく超越者の確認において極まるのである。ここに現実の中でのいわば「不安から安心への」[64] ヤスパースの哲学が存立するものとなる。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

Ⅵ 結

さてヤスパースは、『世界観の心理学』での考察にあたり、決定的な影響を受けた学者として、カント、キルケゴール、ニーチェ、およびヴェーバー（M.Weber）[65] の名を挙げていた。[66] しかもヤスパースは、「哲学すること」を「カントから再発見した」[67] としていたように、ヤスパースにとって「カントはぜったいに回避しえない。彼なくして、我々は哲学においてあくまで無批判にとどまる」[68] とする。このように、ヤスパース哲学にとり、カント批判哲学は最大の重みをなしているのである。とはいえ無論のこと、ヤスパースのカント把握には、カントとの同質性を必ずしも全面的に表現するものとは言いがたいのである。[69] しかしここでは、カント批判哲学としての現代の可能性として、カントとヤスパースとの類似性を指摘しておこう。

そこでまず理性について、カントとヤスパースの言明を見ると、カントにとり「理性は、悟性の規則と原理のもとに統一する能力である」(B359)。これに対し、ヤスパースのいう「理性は、正しく知りうるものの際限のない累積に対して結合する力として現れる……しかし理性は、科学的知の統一を越えてすべてを包括する結合へとおし進む」ものである。ここにカントとヤスパースも、理性は、結合し、統一する能力、力としている。しかもカントによれば、理論的（思弁的）理性は、実践的理性により統一され、さらに理論理性に対する「実践理性の優位」が前提とされていた。一方、ヤスパースにとり理性は、さらに「総体的な交わりの意志」[70] として、実存の真理への道を開いて行く。しかも「実存のない理性は、空洞である。理性は……可能的実存の行為として存在する」[71] とされるように、ここに理性に対する「実存」の優位が示されているといえよう。従ってそこには、カントの理論理性と実践理性の優位、ヤスパースの理性と実存の「優位」という関係の類似性を見ることができよう。

次にカントの物自体とヤスパースの超越者について、その言明を見てみよう。まずカントのいう物自体と現象との関係は、不即不離にあることが指摘されるように、ヤスパースにとっても超越者は、現象と不離不即の関係にあり、カントの物自体は、ヤスパースの超越者と同様に現象の背後にかくれて、全体として認識の場所に姿を現さないという類似性が見られといって良いであろう。更にヤスパースは、カントの認識論と存在論の存立を認めていたが、カントの存在論にはヤスパースのいう「存在そのものとしての包括者」[72] を予測させる接近が認められるところである。

これらのことからヤスパースの場合、『純粋理性批判』や『実践理性批判』におけるカントの理性概念は、ヤスパースによる新しいカント解釈として現代において継承されているように見受けられる。そうだとすればカントの『純粋理性批判』や『実践理性批判』を実存の奥行きで受け止め、発展させたものが、ヤスパースの「理性を伴う実存の哲学」であるという現代的解釈の可能性が見られると考えられることろである。（未完）

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

注）

1）Heidegger, Martin: *Kant und das Problem der Metaphisik*, 1929.Verlag, Vittorio Klostermann GmbH., Frankfurt am Main 1991. ハイデッガー・木場深定訳『カントと形而上学の問題』〔ハイデッガー選集19〕理想社、1967年。

2）カント『純粋理性批判』の原典は、次のものを使用した。

Kant, Immanuel: *Kritik der reinen Vernunft*,1781.in: *Kants Werke*, Hrsg.von Ernst Cassierer, Bd.3, Berlin 1922.

Kant.I.: *Kritik der reinen Vernunft*,1.Aufl.,1781.2.Aufl.,1787.in: *Philosophie Bibliothek*, Bd.37a, Hrsg.von Raymund Schmidt, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1956.

翻訳は、岩波文庫版、篠原英雄訳『純粋理性批判』上中下巻、岩波書店、1961, 62年に拠った。『純粋理性批判』引用箇所の表示は、慣例にならい第一版は、例えば（AI）、第二版は、例えば（BⅦ）ページで記するものとする。

3）Heidegger, M.: a.a.O., S.1. 前掲訳、15ページ。

4）Jaspers, Karl: *Psychologie der Weltanschauungen*, 1919.(abgek.Psychologie). ヤスパース・上村忠雄・前田利男訳『世界観の心理学』〔上巻・ヤスパース選集25〕理想社、1971年。

5）Ebd., S.12-14. 同上訳、50-53ページ。

6）Ebd., S.12. 同上訳、50-51ページ。

7）Jaspers, K.: *Drei Gründer des Philosophierens*, Plato, Augustin und Kant aus dem Werk, *Die großen Philosophen*, Bd., 1.R.Piper & Co.Verlag, München 1957.50.-55.Tausent 1967.(abgek.Kant). ヤスパース・重田英世訳『カント』〔ヤスパース選集８〕理想社、1962年。

8）Ebd., S.119. 同上訳、46ページ。

9）Ebd., S.119. 同上訳、48ページ。

10）Jaspers, K.: *Philosophie II*: Existenzerhellung, 1932.Springer-Verlag, Berlin/Göttingen/Heidelberg 1956.S.255-291.(abgek.PhilosophieⅡ). ヤスパース・草薙正夫・信太正三訳『実存開明』〔哲学Ⅱ〕創文社、1964年、289-329 ページ。

11）林田新二『ヤスパースの実存哲学』弘文堂、1971年、38ページ参照。ヤスパースの意識一般と絶対的意識の問題研究については、例えば、次の文献が挙げられる。斎藤武雄『ヤスパースにおける絶対的意識の構造と展開』創文社、1961年。

12）Kant, I.: *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788.(Herausgeber: Paul Natorp), in: *Kants gesammelte Schriften*, Hrsg.von der Königlisch Preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd., V.1908.（本文中の引用はAVと略記する）。カント・坂部恵・伊古田理訳「実践理性批判」『カント全集７』所収、岩波書店、2000年。深作守文訳「実践理性批判」『カント全集』第七巻所収、理想社、（1965年）1974年。波多野精一・宮本和吉・篠田英雄訳、カント『実践理性批判』岩波文庫、岩波書店、（1979年）2003年。

13）Adickes, Erich: *Kant und das Ding an sich*, Pan Verlag Rolf Heise, Berlin 1924.S.2. 赤松常弘訳・アディッケス『カントと物自体』法政大学出版局、1976年、5ページ。

14）Jaspers, K.: *Einführung in die Philosophie*, Artemis, -Verlag, Zürich 1949.2.Aufl., 1950.S.137. ヤスパース・草薙正夫訳『哲学入門』新潮文庫、新潮社、1954年、177-178ページ。

15）Jaspers, K.: *Von der Wahrheit*, R.Piper & Co.Verlag, München 1947.(abgek.V.d.W.). ヤスパース・林田新二訳『真理について１』〔ヤスパース選集31〕理想社、1976年。

16）Ebd., S.114. 同上訳１、233ページ。

17）Jaspers, K.: *Vernunft und Existenz*, Groningen-Batavia 1935.S.48-49.(abgek.V.u.E.). ヤスパース・草薙正夫訳『理性と実存』〔ヤスパース選集29〕理想社、1952年、92-93ページ。

18）Ebd., S.48. 同上訳、92ページ。

19）Jaspers, K.: Kant, S.222. 前掲訳、90ページ。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

20) Jaspers, K.: *Philosophie Autobiographie*, in: *Philosophie und Welt*, R.Piper & Co. Verlag, München 1958.9.-11.Tausend 1963.S.391.(abgek.Autobiographie). ヤスパース・重田英世訳『哲学的自伝』〔ヤスパース選集14〕理想社、1965年、167ページ。

21) Jaspers, K.: V.u.E., S.26. 前掲訳、54ページ。

22) Jaspers, K.: V.d.W., S.117. 前掲訳１、240ページ。

23) Ebd., S.114. 前掲訳１、235ページ。

24) Jaspers, K.: *Der philosophische Glaube*, R. Piper & Co. Verlag, München 1948. Erstmalig in der Fischer Bücherei, Hamburg 1958. S.42. (abgek. Glaube). ヤスパース・林田新二監訳・中山剛史・平野明彦・深谷潤訳『哲学的信仰』理想社、1998年、62ページ。

25) Ebd., S.42. 同上訳、62ページ。Jaspers, K.: V.d.W., S.115. 前掲訳１、236ページ。

26) Jaspers, K.: V.d.W., S.115. 前掲訳１、236ページ。

27) Ebd., S.115. 前掲訳１、236-237ページ。

28) Jaspers, K.: *Vernunft und Widervernunft in unserer Zeit*, P.Piper & Co.Verlag, München 1950.6.-8.Tausend 1952.S.36. ヤスパース・橋本文夫訳『現代における理性と反理性』〔ヤスパース選集30〕理想社、1974年、52ページ。

29) Ebd., S.34. 同上訳、47ページ。

30) Jaspers, K.: V.d.W., S.115. 前掲訳１、237ページ。

31) Ebd., S.992. ヤスパース・小倉志祥。松田幸子訳『真理について５』〔ヤスパース選集35〕理想社、1985年、253ページ。

32) Jaspers, K.: Philosophie II, S.278. 前掲訳、314ページ。

33) Jaspers, K.: V.d.W., S.116. 前掲訳１、234ページ。

34) Ebd., S.48. 前掲訳１、80ページ。

35) Jaspers, K.: *Philosophie I*, Philosophische Weltorientierung, 1932.Springer-Verlag, Berlin/Göttingen/Heidelberg 1956.S.15. (abgek. Philosophie I). ヤスパース・武藤光朗訳『哲学的世界定位』〔哲学Ⅰ〕創文社、1964年、20ページ。

36) Ebd., S.15. 同上訳、21ページ。

37) 宇都宮芳明『ヤスパース人と思想36』清水書院、1969年、93ページ参照。

38) Jaspers, K.: Philosophie I, S.15. 前掲訳、20ページ。

39) Jaspers, K.: *Philosophie III*: Metaphysik, 1932.Springer-Verlag, Berlin/Göttingen/Heidelberg 1956.S.9. (abgek. PhilosophieⅢ). ヤスパース・鈴木三郎『形而上学』〔哲学Ⅲ〕創文社、1969年、11ページ。

40) Jaspers, K.: V.d.W., S.120. 前掲訳１、246ページ。

41) Ebd., S.120. 前掲訳１、247ページ。Jaspers, K.: Glaube, S.41. 前掲訳、60ページ。

42) Jaspers, K.: Glaube, S.41. 前掲訳、60ページ。

43) Ebd., S.41. 前掲訳、61ページ。

44) このヤスパースの「哲学的世界定位」は、彼の哲学体系の序論に当り、それをカントの「批判哲学」に対応せしめるなら、正しく『純粋理性批判』に当るものといえよう。ヤスパース・草薙正夫・信太正三訳『実存開明』〔哲学Ⅱ〕創文社、1964年、訳者あとがき、499ページ参照。

45) Jaspers, K.: Philosophie II, S.50. 前掲訳、61ページ。

46) Ebd., S.65. 前掲訳、77ページ。

47) Ebd., S.62. 前掲訳、74ページ。

48) Ebd., S.65. 前掲訳、77ページ。

49) Ebd., S.65. 前掲訳、78ページ。

50) Ebd., S.123. 前掲訳、143ページ。

51) Ebd., S.126. 前掲訳、146ページ。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

52）Ebd., S.127. 前掲訳、146ページ。

53）Ebd., S.139. 前掲訳、160ページ。

54）Jaspers, K.: PhilosophieⅢ, S.24. 前掲訳、28ページ。

55）Jaspers, K.: PhilosophieⅡ, S.178. 前掲訳、206ページ。

56）Ebd., S.203. 前掲訳、233ページ。

57）Ebd., S.204. 前掲訳、234ページ。

58）この「実存開明」は、「形而上学」に対する積極的立場を示すものである。この立場は、カントにやや欠けているものであるが、カントの「批判哲学」にならっていえば『実践理性批判』に当るといえよう。ヤスパース・草薙正夫・信太正三訳『実存開明』〔哲学Ⅱ〕創文社、1964年、訳者あとがき、499ページ参照。

59）Jaspers, K.: PhilosophieⅢ, S.36-67. 前掲訳、40-76ページ。

60）Ebd., S.68-127. 前掲訳、77-145ページ。

61）Ebd., S.128-236. 前掲訳、146-273ページ。

62）Ebd., S.37. 前掲訳、41ページ。

63）Ebd., S.38. 前掲訳、41-42ページ。

64）Ebd., S.235. 前掲訳、270ページ。

65）社会学者であったヴェーバーについて、ヤスパースはどのように評価するか。ヤスパースによれば、ヴェーバーの「諸研究には、或る種の世界観の心理学的な分析が含まれており」（Jaspers, K.: Psychologie, S.13. 前掲訳、53ページ）、ヴェーバーが、方式化により「世界観的価値関係づけと科学的観察とを分離すること」（Ebd., S.13. 同上訳、53ページ）を行ったとしている。そしてその「ヴェーバーの科学は、科学が仕える実存の機能である。……彼は哲学をなんら教えなかった。しかし彼は一個の哲学であった」（Jaspers, K.: *Max Weber*, Politiker / Forscher / Philosoph, R. Piper & Co. Verlag, München 1958. S.64）とする。そして「ヴェーバーは、彼の思考とその人柄において他のどの思想家も及ばぬほど、私（ヤスパース）の哲学にとって本質的なものとなった」（Jaspers, K.: Autobiographie, S.306. 前掲訳、46ページ）と高く評価している。

66）Jaspers, K.: Psychologie, S.12-13. 前掲訳、50-51ページ。

67）Jaspers, K.: Autobiographie, S.391. 前掲訳、167ページ。

68）Jaspers, K.: Kant, S.398. 前掲訳、415ページ。

69）カントとヤスパースの異質性については、既述のように、例えば、ヤスパースには、カントの感性、純粋理性、物自体といった概念はなく、ヤスパースには、実存、超越者、包括者の概念が含まれているところである。

70）Jaspers, K.: V.d.W., S.115. 前掲訳１、236ページ。

71）Jaspers, K.: V.u.E., S.42. 前掲訳、81ページ。

72）Jaspers, K.: V.d.W.S.47. 前掲訳、102ページ。

引用・参考文献

安部能成『新版カントの実践哲学』剄草書房、1979年。

Adickes, Erich: *Kant und das Ding an sich*, Pan Verlag Rolf Heise, Berlin 1924. 赤松常弘訳・アディッケス『カントと物自体』法政大学出版局、1976年。

有福孝岳『カントの超越論的主体性の哲学』理想社、1990年。

有福孝岳・坂部恵編『カント事典』弘文堂、1997年。

伴博『カントとヤスパース―勝義の哲学的人間学への道―』北樹出版、1999年。

林達夫他監修『哲学事典』平凡社、（1971年）1979年。

林田新二『ヤスパースの実存哲学』弘文堂、1971年。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

Heidegger, Martin: *Kant und das Problem der Metaphisik*, 1929.Verlag, Vittorio Klostermann GmbH., Frankfurt am Main 1991. ハイデッガー・木場深定訳『カントと形而上学の問題』〔ハイデッガー選集19〕理想社、1967年。

廣松渉他編集『岩波　哲学・思想事典』岩波書店、(1998年) 2003年。

岩崎武雄『カント「純粋理性批判」の研究』勁草書房、1965年。

Jaspers, Karl: *Psychologie der Weltanschauungen*, 1919. ヤスパース・上村忠雄・前田利男訳『世界観の心理学』〔上下巻・ヤスパース選集25, 26〕理想社、1971年。

Jaspers, K.: *Philosophie I*: Philosophische Weltorientierung, 1932.Springer-Verlag, Berlin/Göttingen/Heidelberg 1956. ヤスパース・武藤光朗訳『哲学的世界定位』〔哲学Ⅰ〕創文社、1964年。

Jaspers, K.: *Philosophie II*: Existenzerhellung, 1932.Springer-Verlag, Berlin/Göttingen/Heidelberg 1956. ヤスパース・草薙正夫・信太正三訳『実存開明』〔哲学Ⅱ〕創文社、1964年、

Jaspers, K.: *Philosophie III*: Metaphysik, 1932.Springer-Verlag, Berlin/Göttingen/Heidelberg 1956. ヤスパース・鈴木三郎『形而上学』〔哲学Ⅲ〕創文社、1969年。

Jaspers, K.: *Vernunft und Existenz*, Groningen-Batavia 1935. ヤスパース・草薙正夫訳『理性と実存』〔ヤスパース選集29〕理想社、1952年

Jaspers, K.: *Die Schuldfrage*, Lambert Schneider, Heidelberg 1946. *Lebensfragen der deutschen Politik*, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1962. ヤスパース・橋本文夫訳『戦争の罪を問う』平凡社ライブラリー256、平凡社、1998年。

Jaspers, K.: *Von der Wahrheit*, R.Piper & Co.Verlag, München 1947. ヤスパース・林田新二訳『真理について１』〔ヤスパース選集31〕理想社、1976年。

Jaspers, K.: *Von der Wahrheit*, R.Piper & Co.Verlag, München 1947. ヤスパース・小林靖昌訳『真理について２』〔ヤスパース選集32〕理想社、1977年。

Jaspers, K.: *Von der Wahrheit*, R.Piper & Co.Verlag, München 1947. ヤスパース・浜田恂子訳『真理について３』〔ヤスパース選集33〕理想社、1976年。

Jaspers, K.: *Von der Wahrheit*, R.Piper & Co.Verlag, München 1947. ヤスパース・上妻精・盛永審一郎訳『真理について４』〔ヤスパース選集34〕理想社、1997年。

Jaspers, K.: *Von der Wahrheit*, R.Piper & Co.Verlag, München 1947. ヤスパース・小倉志祥・松田幸子訳『真理について５』〔ヤスパース選集35〕理想社、1985年。

Jaspers, K.: *Der philosophische Glaube*, R. Piper & Co. Verlag, München 1948. Erstmalig in der Fischer Bücherei, Hamburg 1958. S.42. ヤスパース・林田新二監訳・中山剛史・平野明彦・深谷潤訳『哲学的信仰』理想社、1998年。

Jaspers, K.: *Einführung in die Philosophie*, Artemis, -Verlag, Zürich 1949.2.Aufl., 1950. ヤスパース・草薙正夫訳『哲学入門』新潮文庫、新潮社、1954年。

Jaspers, K.: *Vernunft und Widervernunft in unserer Zeit*, P.Piper & Co.Verlag, München 1950.6.-8.Tausend 1952. ヤスパース・橋本文夫訳『現代における理性と反理性』〔ヤスパース選集30〕理想社、1974年。

Jaspers, K.: *Drei Gründer des Philosophierens*, Plato, Augustin und Kant aus dem Werk, *Die großen Philosophen*, Bd., 1.R.Piper & Co.Verlag, München 1957.50.-55.Tausent 1967. ヤスパース・重田英世訳『カント』〔ヤスパース選集８〕理想社、1962年。

Jaspers, K.: *Philosophie Autobiographie*, in: *Philosophie und Welt*, R.Piper & Co.Verlag, München 1958.9.-11.Tausend 1963. ヤスパース・重田英世訳『哲学的自伝』〔ヤスパース選集14〕理想社、1965年。

Jaspers, K.: *Max Weber*, Politiker / Forscher / Philosoph, R. Piper & Co. Verlag, München 1958.

Jaspers, K.: *Der philosophischer Glaube angesichts der Offenbarung*, R. Piper & Co. Verlag, München 1962.8.-13. Tausend, 1963. ヤスパース・重田英世訳『啓示に面しての哲学的信仰』創文社、1986年。

Kant, Immanuel: *Kritik der reinen Vernunft*, 1781.in: Kants Werke, Hrsg.von Ernst Cassierer, Bd.3, Berlin 1922.

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

Kant.I.: *Kritik der reinen Vernunft*, 1.Aufl.,1781.2.Aufl.,1787.in: Philosophie Bibliothek, Bd.37a, Hrsg.von Raymund Schmidt, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1956. 篠原英雄訳『純粋理性批判』上中下巻、岩波文庫、岩波書店、1961, 62年。

Kant, I.: *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788.(Herausgeber: Paul Natorp), in: *Kants gesammelte Schriften*, Hrsg.von der Königlisch Preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd., V.1908. カント・坂部恵・伊古田理訳「実践理性批判」『カント全集７』所収、岩波書店、2000年。深作守文訳「実践理性批判」『カント全集』第七巻所収、理想社、（1965年）1974年。波多野精一・宮本和吉・篠田英雄訳、カント『実践理性批判』岩波文庫、岩波書店、（1979年）2003年。

北岡武司『カントと形而上学―物自体と自由をめぐって―』世界思想社、2001年。

高坂正顕『高坂正顕著作集第二巻』理想社、1954年。

高坂正顕『高坂正顕著作集第五巻』理想社、1964年。

黒崎政男『カント『純粋理性批判』入門』講談社選書メチエ192、講談社、2000年。

草薙正夫『ヤスパース哲学入門』以文社、1973年。

牧野英二『カント純粋理性批判の研究』法政大学出版局、（1989年）1993年。

牧野英二・中島義道・大橋容一郎編『カント―現代哲学としての批判哲学』状況出版、1994年。

森哲彦「カント純粋理性批判の解明」名古屋市立大学人文社会学部『研究紀要』第17号所収、2004年。

斎藤武雄『ヤスパースにおける絶対的意識の構造と展開』創文社、1961年。

斎藤武雄『ヤスパース研究』理想社、1962年。

高峯一愚『純粋理性批判入門』論創社、1979年。

寺脇丕信『ヤスパースの実存と政治思想』北樹出版、1991年。

宇都宮芳明『ヤスパース　人と思想36』清水書院、1969年。

渡辺美雄・小田清治編『西洋哲学のあゆみ』尚学社、1967年。

山下太郎「物自体と包括者―カントとヤスパース」日本大学人文科学研所『研究紀要』第31号所収、1985年。

山崎庸佑編著『カント超越論哲学の再検討―あるいは最新版「哲学」案内―』北樹出版、1987年。

NII-Electronic Library Service